

## 城戸哲郎さんを 偲ぶ

5月22日(日) 会員交

流部会長の城戸哲郎氏が亡くなられた。(享年63)

昨年の暮れから入退院を繰り返しておられたが、病気の進行を食い止めることはできなかった。5月23日通夜、24日葬儀が営まれた。さくらえのとき、「五分咲きの花にも夫の本復を」と詠まれた夫人の心中を思うと悼ましい。

6月27日、理事、監事12名で理事会を開いた後、城戸さんを偲んだ。

### 10,000本運動

城戸さんは、下関響灘ライオンズクラブ(LC)が深坂自然の森に桜を植えるという運動を企画したときからの中心メンバーの一人である。平成11年からオーナー桜を植え始めた。「10,000本運動」と言う物議をかもしたネーミングは城戸さんだった。最初は「深坂桜一杯運動」だったが、城戸さんの感性でインパクトのあるネーミングが必要との主張で、かなり強引に10,000本運動にしてしまった。そのおかげで、当初は勢いがついたが、1,500本ほど植えたところで、もう植える場所がな

くなった。新たな申込みを断るのに事務局の西川浩子さんが大変な苦労をするようになった。

### 「さくら友の会」、NPO法人の発足

平成18年に発足する「下関深坂さくら友の会」の発足にあたって、勿論中心になって働いた。「さくら友の会」の理事のうちライオンズクラブ以外のメンバーは、城戸さんの誘いと面接を受けて発起人に加わったものが多い。その後、NPO法人の取得にも、中心になって働いた。好きだったのだろう。本業の自動車関係の仕事は何時してると冷やかされながら、さくら友の会のことをいつも考えていた。

### いつも「さくら友の会」

一つステップアップすると、陰でコツコツと調べていて、さくら友の会の歩みを止めさせなかった。昨年は、指定管理者に応募することを決め、自ら色々調査して、みんなに宿題を出した。自分は7割がた腹案ができていたのだから、皆の意識高揚のために初めから出さずに考えさせる。最初はあまり熱心でなかったメンバーでも、一人二人と意識が高揚して宿題をし

も責任を果たさざるを得なくなる。考えてきて熱い議論を戦わせるようになる。皆一体感が出てきて、いつのまにか是非成功させなくてはいけぬという気にさせられていた。マネージャの才能が豊かであった。

### 「会員交流部会長」

会員交流部会では、桜研修旅行を実現させた。吉野の桜、韓国の釜山・鎮海・慶州のさくら、熊本の市房ダムなどの計画は素晴らし

### 城戸哲郎さんを悼む



二〇一〇年3月の桜研修旅行は、韓国の釜山、鎮海、慶州でした。数少ないツーショット。

かった。肝が据わっていたというか、柔軟性がないわけではないが、決めたことは必ず実現させた。これは、できそうで、なかなか誰にでもできることではなかった。定例会の毎回の昼食では、深坂の台所の後方支援を勤めるなど、本当に感謝したいことばかりだ。

### 好奇心旺盛

城戸さんは、生涯、学習が好きだった。詩吟、市民

大学の講座、安岡の郷土史研究会などと、趣味が広かった。歴史にも興味を持ち、亡くなる一月前にも土井ケ浜博物館に行きたいと言った。奥さんが連れて行っていた。戦争史や、明治維新前後の志士たちなどにも関心が高かった。

### 深坂大好き

そして、何よりも深坂自然の森、桜、さくら友の会が好きだった。「さくら友の会」のメンバーは素晴らし

い。こんな人たちはそう居らんよ。」というのが、城戸さんの口癖だった。みんなが本当に好きだったのだ。みんなと一緒に活動しているのが楽しかったのだ。

### 城戸さんの桜

城戸さんの桜は、深坂茶屋の上にある。一本はひょろりと城戸さんのように背が高いが、本人同様腰が悪いか、傾いて立っている。

もう1本は隣にある。銀婚式の記念樹だ。2本とも奥まった日当たりの悪いところに、遠慮がちに植わっている。いい場所を人に譲り、「おれたちはここでよか。」とでも言いそう。優しい男。樹木葬にも関心があった城戸さんだ。お墓の中に居るよりは、よほど、この方が気に入るだろう。深坂に行けば、城戸さんに出会いそうな気がする。パイパス下の斜面で、森の家の台所で。ピロティーで食事していると、定例会のとき、城戸さんの車もその辺に一緒に置いてありそうな気がする。

### 城戸さんの夢

城戸さんは、深坂の森は遊具などを揃えた公園になることを恐れていた。深坂は里山だ。人間と自然が互いに恩恵を施しあって保持される関係が築かれねばならない。いろんな夢を持っていた。シイタケ栽培、なめたけ栽培、山菜などの食材を自然栽培し、それらを用いて年に数回「森のレストラン」を開くというと言う企画を温めていた。いつか、実現したいものだ。さよならは言いたくない。会員からも外さないよ。君は永久会員にしよう。

### 桜四方山

○世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし(在原業平) 女性にもてた業平さん、自らを花になぞらえて、自分が居なければ世の中静かだろうということか。もてを我慢しているように見える。○この花の一節(ひとよ)のうちには百種(ももくさ)の、言(こと)ぞ隠れるおほろかにすな(藤原広嗣) この桜の枝には沢山の言葉が込められていきますから粗末にしないでくださいという歌を添えて女性に一枝を贈ったという。○万葉の時代は優雅ですね。○敷島の大和心を人間はば朝日にほふ山さくら花(本居宣長)。さて朝日に句う山桜花の心とは何だろう？日本人は理性よりも感性で意思決定しているのだろうか？桜は華やかな恋歌だけではなく。儚さや死を思う歌も多い。此れの方が哲学的だ。○願わくは花の下にて春死なさんその如月の望月の頃(西行法師)、きさらぎの望月の頃というのは釈迦入滅の日ということらしい。○散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき。詠み人は不明だが業平の歌への返歌らしい。○さまざまのこと思ひ出す桜かな(松尾芭蕉) ○夕桜家ある人はとくかえる(小林一茶) ○散る桜残る桜も散る桜(良寛)